2020年01月07日 新潟日報 朝刊 広告２面 021頁　　(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

未来のチカラ in 上越
つたえる　つながる　つかえる
新潟日報

挑め、上越。

Joetsu Challenger's INTERVIEW
上越チャレンジャーズインタビュー

#007 高田の歴史文化を守る。伝える。

あわゆき組 前代表
小川菜々（おがわな な）(38)

ありのままの魅力で、まちの新たな高田ファンを。

生まれ育った高田の下紺屋町(現本町7丁目)で呉服店の仕事をしながら、2年間市民グループ「あわゆき組」の代表を務めた小川菜々さん(38歳)。町家や高田のまち並みを次の世代へ残したいと願い、まちの宝物にスポットをあてて情報発信し、まち歩き「あわゆき道中」などの企画と運営を行っている。

子どものころから、この高田が好きだったんです。ちょっと歩くと古い神社があって大木が生えていて、古いまち並みを歩いているだけで楽しくなるんです。金谷山のてっぺんに登るとまちが一望できるのですが、数十年前は、森の中にまちがあるように見えました。いまはお寺や神社、旧家の庭の木々が少なくなってしまい、まちの中にぽつぽつと緑があるように見えます。昔は幸町のあたりは森のようでした。旧家がたくさんあって、そこには立派なお庭があって、雰囲気がありましたね。まちにいながら自然に囲まれて、いつも季節の香りがしていました。

町家はオープンな造りで、どの家も土間が奥まで細く続いて、だれでも通れました。「ちょっと通りますね」って(笑)。建物が隙間なく建っているから、路地まで行かないと曲がれないのですが、土間を通ると近道ができました。実際に空気も通りやすくなるので、色んな意味で風通しがよかったと思います。火事のときは土間にホースを通して奥の家を消火したこともありました。

私は15歳のときに、上越を離れて新潟市に行きましたが、そのときに高田は特別なのだと感じました。

東京の大学在学中には中国へ3ヵ月間の研修に行く機会に恵まれました。中国はスケールが大きくて大陸文化の面白さを実感しました。日本とは全くちがう価値観に出会い、自分は狭い世界でしか物を見ていなかったと気づかされました。

大学卒業後は中国語を学ぶ目的で、1年間、中国に留学。9月入学でしたから、半年間アルバイトをして、学費を貯めて中国へ。寮に入る予定でしたが、現地でいっぱいだと言われて、言葉もよく分からなかったから、その日は野宿かと思いました(笑)。

中国に1年住んで生活や文化がよく分かってくると、逆に日本人ってなんて細やかなのだろうと再認識しました。中国では就職活動もしましたが、やはり日本に帰りたいと思い帰国。それから京都で3年間働き、在職中にご縁があった大徳寺に、3ヵ月住みこみをしたりもしました。国宝のお寺で暮らせたのは、とても貴重な体験だったと思います。

京都から高田に戻ったのは2009年のことです。精神的に大変なときだったので、高田の人の温かさと優しさに、とても助けられました。隣近所の関わり合いが濃くて、冬になると雪かきもお互いにしたり。雁木だって、そこまで家を建てても構わないのに、それぞれの家が雁木を造って、それがつながってみんなの道になるのです。雪国が育んだ人情があり、その人情が形になって表れているのが雁木だと思います。

高田に帰って、すぐに「あわゆき組」に入らせていただき、活動のお手伝いを始めました。

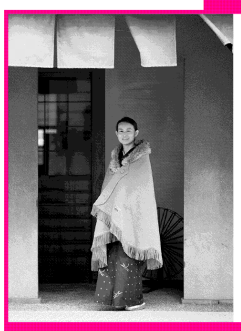
「あわゆき組」は建築家の関由有子さんが代表をされて2004年にスタートしました。「このまちって、すごく素敵な古いものがたくさん残っているのに、その価値を見出している方は多くない。注目されていないから、このままでは時代の流れで、どんどん壊されて、いつの間にか、どこにでもある地方都市になってしまう。そうなってからでは手遅れだから、スポットをあてて大事にしよう」って。そういう思いを持った人が集まって結成したのが「あわゆき組」です。まちを観に来た方の休むところがないから、お茶を飲んで休憩していただこうと、町家をお借りして甘味処を出したのが始まりです。あわゆき組のメンバーが着物姿でお給仕をして、みなさんに楽しんでいただく春の活動として、いまも続いています。そのほかに、夏は「あわゆき読みかたり」を高田世界館や町家交流館「高田小町」や旧今井染物屋で行い、冬は「あわゆき道中」を開催するなど、年3回の活動が中心です。

いまから2年前に関さんが代表を辞めるとおっしゃったときは「あわゆき組」を解散するという話も出ました。そこで、代表をするのは大変ですが、年齢的なことと、私が町家に住んでいることもあり、引き受けさせていただきました。関さんは、とても大きな存在で、建築家だから町家のこともよく知っていらして、センスもあります。「あわゆき組」の活動の支えでした。その関さんがいらっしゃらない、イチからのスタート。試行錯誤しましたが、代表をさせていただき、あらためて高田のまちを深く知ることができました。

冬の「あわゆき道中」では、参加者の方も防寒具の角巻と雪下駄姿で雁木通りを練り歩きます。ここ数年は高田瞽女(ごぜ)の「門付け」の再現と合わせて「あわゆき道中」をしています。

アマチュアカメラマンの方など、多くの方が訪れるようになりました。

高田瞽女で国の無形文化財となった杉本キクイさんを訪ねて、瞽女がたどった道や宿を歩いて瞽女さんは三味線を奏でて語り物などを唄いながら、各地を門付けして歩く「盲目の女旅芸人」です。近世までは東北を除いて、ほぼ全国的にみられ、明治以降は新潟県の高田と長岡に多数存在していました。高田瞽女は、高田を中心に頸城三郡や信州佐久、上田あたりまで旅に出ると2ヵ月は家に帰らず、1年に約300日も各地をまわっていました。その旅を支えたのは約1,000軒にもおよぶ村々の瞽女宿(裕福な農家が無償で瞽女の食事と宿を提供)と、農山村の人々でした。瞽女宿に着くと荷物を置いて、瞽女さんが着いたことを知らせるために一軒一軒まわって「門付け」という短い歌を披露して、お米などをもらっていました。その「門付け」を高田のまちで再現したところ、評判になりその心象世界を描いた、斎藤真一氏の絵画を展示する瞽女ミュージアム高田も2015(平成27)年に開館しました。今年の春には、映画「瞽女GOZE」(瀧澤正治監督)が公開されます。私も映画のエキストラとして出させてもらいました。上越も魅力的に描かれているので、この映画を観てひとりでも多くの方が上越を訪ねてくれたらうれしいです。



「あわゆき組」の活動は昨年から原点に返り、普段は公開していない町家を巡るツアーを企画しました。ツアーの中で訪ねた店舗のひとつは、明治のころは牛鍋屋で、外見からは分かりませんが、中は昔のままです。当時は近くに遊郭があり、上級の軍人さんが遊郭の女性と牛鍋屋で会っていたそうです。表がお店で、奥は宿泊ができるようになっています。お客さん同士が顔を合わせないように造られた、秘密の通路や隠し部屋が当時のままに残されています。ほかにも表からはシャッターが閉まった商店にしか見えないけれど、中は古い立派な造りの町家がたくさんあります。町家をリノベーションしたTerraSky(テラスカイ)というIT関連のオフィスも、特別に見学させていただきました。

高田のまちなか、大町の道はカーブしていて、敵が攻めてきたときのために見通しが悪くなっています。また、各家がギザギザに並んで建ち、1人分の隠れるスペースがあって、「武者隠し」と呼ばれます。まちの中を流れる儀明川は、昔は物流に使われて、いまの土橋のあたりに船着き場があったそうです。このような歴史的背景を知ると、いままで何気なく見ていたまちの風景が変わっていきます。ちなみに、建物はなくなってしまったけど、いまでも雁木だけは残っている「根性雁木」と呼ばれるスポットもあります。

高田瞽女MUSEUM

高田のまちのいちばんの魅力は、昔からの暮らしがそのままの姿で残っているところです。造られた観光地ではないから、興味を持って調べないと普通のまちにしか見えません。上越に住んでいても、町家に一度も入ったことがない人も多くて、実際に見て体感しないと分からないことがたくさんあります。私自身、町家に住んでいても「あわゆき組」の活動に携わるまで、昔の面影を残す場所がこんなにたくさんあることに気づきませんでした。

私の家が呉服屋をしているので、まち歩きをするのに着物をお貸しすることもあります。着物を着つけして差し上げると、海外の方をはじめ、みなさんからとても喜ばれます。高田は着物を着て歩くと楽しいまちです。ですので、できれば生地や絵柄にこだわった、本物の着物に触れてほしいと思います。着物だけでなく、昔は身の回りのもの、すべてが本物でした。いまはそれが減ってしまい、本物に接していないと感性も鈍るのではないかと、自分自身を含めて心配になります。私は、美術館や博物館に行き、いいものに触れる機会を多く持つようにしています。昔は、普段の暮らしの中で審美眼が養われていたのだと思います。

個人的な思いになってしまいますが、時代とともに、まちが姿を変えていくのは仕方ないけれど、何かしらの形が残っていってほしいです。子どもたちにも、私がいいなぁと思っていた上越を感じてほしいです。2009年に私が戻ってきてから10年、上越には県外や海外から観光で訪れる方が増えています。観光化されたものではない、そのままの雁木や町家に感動してくださいます。だから、大事にしていきたいと思うし、移住だけでなく、このまちに関わってくれる人を増やしていく仕掛けをしていきたいです。幸いなことに「あわゆき組」は若い方も少しずつ入ってきて、全体で20人くらい。主に活動しているのは約半数で上越市外の方もいます。私は昨年の12月に2年間務めた代表を降りて、2人に共同代表を引き継ぎました。今年の「あわゆき道中」は2月9日です。いままで未公開だった町家も巡る予定ですので、ぜひ多くの方にご参加いただきたいです。お待ちしています。

田中産業株式会社は、上越のさまざまな挑戦を応援します。